

今回のテーマ

春の息吹が感じられるようになりました。雪解けも進み、温かい日が続いています。卒業式も終わり、年度末の事務処理＆新年度に向けて着々と準備が進んでいるのではないのでしょうか？多忙を極める時期です。無理せずに頑張りましょう！今号は「高校向け教材づくりに向けて」と「メディアリテラシー教育についての私の考え」です。

ネットリスク研高校生向け教材の開発

2～3月にかけて立て続けに県内の高校から講演依頼が入り、そのほとんどが4～5月に行われます。新年度のPTA集会和抱き合わせて行うことも多く、保護者も一緒に参観するというスタイルが主流です。研究会として高校の講演依頼を受けたことはなかったのも、養成協の認定インストラクターのメンバーに声をかけ、改めて勉強会＋教材づくりに着手しました。16日に1回目を行い、方向性が見えてきました。制作にあたって、留意している点は以下の点です。皆さんの教材づくりの参考になればと思い、またご意見を頂ければと願ひ報告します。

(1) 高校生は利用の仕方では我々よりプロである

ご存知のとおり、高校生のスマホ普及率は9割を超えています。彼らはスマホを駆使し、生活しています。その高校生の文化を理解するところがスタートでした。

(2) 自覚を促す問いかけ

ほとんどの人が利用しているということは問題を生じていることも多く、ただ、それが問題だと気づいていない場合が多いです。利用の仕方を見つめ直すこと。

(3) 講演での双方向の対話

講演者として聞いている人を飽きさせない工夫。どの発達段階でも必要ですが…

(4) 自律を促す対策

「こんなに体に影響があるなら少し減らそうかな」「最近寝られなかったのはスマホが原因かな？」「学力も下がってきたし、使用時間を1日1時間に減らそう」と思ってくれたら大成功です。自ら律して使用を制限していくことを促したいです。

(5) 将来性を見据える

昨今、話題になっている「不適切動画」に対する懸念が高校の先生方は特に気にしているようです。たった数秒のおふさげがどれだけ社会に大きな影響がおよぼすか、自分の未来を閉ざしていくことになるのか再確認したいですね。

よりよいものを目指し、鋭意制作中です。完成し、検証したら皆さんにも公開します。(本間)

メディア・リテラシー教育の私の理解

「メディア・リテラシー」、学校教育で汎用的な能力として世界中がその能力の育成を目指していると思われまます。

文献によれば、メディア・リテラシーは1930年代に英国で生まれたものです。当時、新聞や大衆小説、雑誌といったポピュラーカルチャーが誕生し、芸術性に富んでいないマスメディア全体を“批判対象”とし、学校教育の内容としてメディアを扱い始めました(文化批判だけではなく、学校教育内に取り入れたことに革新性があります)。しかし、1950年代に入るとマスメディア全体を低俗なメディアと批判するのではなく、良質なものは鑑賞や楽しみの対象として認め、メディアをわかる能力が大切と方向性が変わり始めました。そして、1980年代に英国のメディア教育は英語科の教育内容としての制度化を歩み始めました。その英国の姿勢から学び取り、商業主義的性格に焦点をあてて、先端のメディア教育を行っているのが、カナダのモンリオ州です。メディアを分析し、評価し、考察する。その中で正しい情報はなにか、その情報を読み取った聴衆者はどのように感じるか、その情報の込められている価値観は何かを子どもたちが討論を通して学びあっていく実践を今でも実践しています。

活動の例を紹介すると以下なものです。(1980年代英国)

①カラーとモノクロ写真を比較し、メディアの選択によって生じる違いを述べる。②写真を撮影したり、音声・映像テープを作ったりして、考えや感情を表現し、批判的に思考する。③映画を製作し、他の子どもと議論しながら自分たちで編集する。④ビデオカメラをモニターに接続し、イメージの変化について議論と実験をする。

映画を使った実践では例えば、コマを止める、音と映像へ目ませる、始めと終わりへの注目、オーディエンスをひきつける工夫など既存メディアを使って、対象となるメディアを分析し、考察することを学習内容としています。

メディア教育はインターネットの出現により転換期を迎えていると感じまます。それまではメディア業界や一部の人が発信していた情報はネット・スマホを普及により誰も発信者となります。『ネットは世界を変えられる』そんな最強のメディアをもつ子どもが正しいリテラシーを持つことが必要ではないでしょうか？その神髄は、クリティカルシンキングの育成と考えまます。(参考文献:カナダのメディアリテラシー教育 上杉嘉見 2008)(本間)